

論文

チャハ語の Differential Object Marking に関する仮説*

原 将吾
(筑波大学)

s1630033@u.tsukuba.ac.jp

Abstract

This report suggests a hypothesis which explains the distribution of a particle marking direct object in Chaha, namely *ja-*. According to Leslau (1950) this particle can be used when the object is definite, but not obligatorily. From the data I collected it is possible to say that, unlike Leslau's explanation, not only definiteness but also animacy plays the role: definite human objects are more likely to be marked by this particle than definite non-human objects are.

1 はじめに

筆者は2017年12月にエチオピア連邦民主共和国南部諸民族州、グラゲゾーン (Gurage zone) のエムデベル (Emdibir¹) で調査を行った。本稿はその調査の一部である。調査対象はエムデベルを含むチャハ地区 (Chaha woreda) で話されるグラゲ諸語のチャハ語である。

チャハ語には目的語を標示する小辞 *ja-* が存在する (1)。Leslau (1950: 17) によれば、この小辞は目的語が定の場合にのみ現れることができるが、必須の

* 本調査は2017年12月に実施されたものである。調査はセベト・ベト・グラゲ語 (ISO 639-3 *sgw*) の一方方言であるチャハ語について行った。調査にあたっては情報提供者として当時エムデベル在住であったAZ氏に協力をしていただいた。また今回の調査は彼を紹介してくれた友人の助けなしには成し得なかったものである。以上2名の協力者に感謝を表す。

本稿で用いる略号を以下に示す。3sm = 3人称単数男性、AUX = 助動詞、D = 指示詞、GN = 地名、M = 目的語標識、N = 名詞、OBJ = 目的語、PN = 人名、PST = 過去、SBJ = 主語、V = 動詞

本稿で用いる用例の表記は以下のルールに従う。他の資料から引用したものは原文の表記をそのまま使用する。本調査から得られたデータは原則としてIPAで表記する。ただし以下のものについてはその限りではない。q = [k'], š = [ʃ], t̥ = [t']

¹ 綴りについては文献によって揺れがあり、Rose (2007) は *Endeber* としている。本稿では調査協力者の発音 (*imdibir*) に従いエムデベル (*Emdibir*) とする。

音ソフトはプリインストールの Sound Recorder (ver. 5.1) を用い、データは Wave 形式でファイル化した。調査内容は予め作成した英文を口頭で伝えながら、それをチャハ語でどう言うか尋ね、回答を記録した。その後小辞 *ja-* の出現/非出現を逆転させた文を作文し「この文は可能であるか」と尋ねた。質問の際に用いた英文は全て主語を 3 人称の人称代名詞で人間を表す *he* または *she* に統一し、主語・目的語間における定性や有生性の相対的な差が問題にならないようにした。また目的語については人間、人間以外の動物、無生物の分類を有生性に、固有名詞、定⁴、不定の分類を定性にそれぞれ定め、これを組み合わせた 8 通り⁵ の分類を立てた。今回用いた動詞は全て人称代名詞接尾形を目的語に取りうるものである。また回答は全て (2) に示す構文で発話してもらった。

(2)	<i>huta</i>	<i>((jə-)zi)</i>	N	V-m	<i>banə</i>
	3sm.SBJ	((M)D)	N	V-PST	AUX
	「彼は (その) N を V していた」				

3 結果

今回の調査から得られたデータは、23 種類の動詞⁶に対して人間・固有名詞のものが 8 例、人間で定/不定のものがそれぞれ 11 例、動物で定/不定のものがそれぞれ 10 例、無生物で固有名詞のもの⁷が 7 例、無生物で定/不定のものがそれぞれ 25 例である。無生物のものが多いののは、質問文作成の都合である。以下の表 1 はこれを目的語の有生性・定性毎に *ja-* が必須のもの、任意で出現可能なもの、出現不可能なものに分類し、それぞれの割合を示したものである。なお (3) に例文を示す。

⁴ チャハ語は定冠詞のような定の標識を持たないため、指示詞 *zi* を名詞に付加して定であることを示す。

⁵ 動物かつ固有名詞のものは例文が作りやすく、今回は扱わなかった。

⁶ 使用した動詞はすべて人称代名詞接尾形を伴うことができ、従って直接目的語を取りうると思われるものである。

⁷ 町名や村名が該当する。

表 1: *jə*-の出現可能性と有生性・定性 (用例数/割合)

有生性	定性	必須	可能	不可能	合計
人間	固有名詞	5/62.5%	3/37.5%	0/0%	8/100%
	定	0/0%	11/100%	0/0%	11/100%
	不定	0/0%	5/45.5%	6/54.5%	11/100%
動物	定	0/0%	9/90.0%	1/10.0%	10/100%
	不定	0/0%	2/20.0%	8/80.0%	10/100%
無生物	固有名詞	0/0%	2/28.6%	5/71.4%	7/100%
	定	0/0%	13/52.0%	12/48.0%	25/100%
	不定	0/0%	1/4.0%	24/96.0%	25/100%

(3) a. 人間・固有名詞 (必須)

huta *jə-dəsta* *qəṭərə-n-m* *banə*
 3sm.SBJ M-PN 殺す-3sm.OBJ⁸-PST AUX
 「彼は Desta を殺した」

b. 人間・固有名詞 (可能)

huta (*jə*-)*dəsta* *ašə-m* *banə*
 3sm.SBJ (M-)PN 見る-PST AUX
 「彼は Desta を見た」

c. 人間・定 (可能)

huta (*jə*-)*zi-miss* *asədədə-m* *banə*
 3sm.SBJ (M-)D-男 追う-PST AUX
 「彼はその男を追いかけた」

d. 人間・不定 (可能)

huta (*jə*-)*miss* *dənəgə-m* *banə*
 3sm.SBJ (M-)男 叩く-PST AUX
 「彼は男を叩いた」

e. 人間・不定 (不可能)

huta *miss* *ašə-m* *banə*
 3sm.SBJ 男 見る-PST AUX
 「彼は男を見た」

⁸ この動詞に付加され目的語名詞に一致する目的語標示 (Object Marker) も出現する場合としない場合があり "Differential" であるが、本稿ではデータが少ないため扱わなかった。

f. 動物・定（可能）

huta (jə-)zəram⁹ asijə-m banə
 3sm.SBJ (M-)乳牛.D 売る-PST AUX
 「彼はその乳牛を売った」

g. 動物・定（不可能）

huta zəram sijə-m banə
 3sm.SBJ 乳牛.D 買う-PST AUX
 「彼はその乳牛を買った」

h. 動物・不定（可能）

huta (jə-)gijə dənəgə-m banə
 3sm.SBJ (M-)犬 叩く-PST AUX
 「彼は犬を叩いた」

i. 動物・不定（不可能）

huta əram asijə-m banə
 3sm.SBJ 乳牛 売る-PST AUX
 「彼は乳牛を売った」

j. 無生物・固有名詞（可能）

huta (y-)aksum kətəma səpərə-n-m banə
 3sm.SBJ (M-)GN 街 壊す-3sm.OBJ-PST AUX
 「彼はアクスムの町を破壊した」

k. 無生物・固有名詞（不可能）

huta g^wondar kətəma m^wək^jərə-n-m banə
 3sm.SBJ GN 街 燃やす-3sm.OBJ-PST AUX
 「彼はゴンダールの町を燃やした」

l. 無生物・定（可能）

huta (jə-)zi-məkina səpərə-m banə
 3sm.SBJ (M-)D-車 壊す-PST AUX
 「彼はその車を壊した」

⁹ zi-əram (D-乳牛) の縮約形である。

m. 無生物・定（不可能）

huta	zi-metəf	sijə-m	banə
3sm.SBJ	D-本	買う-PST	AUX

「彼はその本を買った」

n. 無生物・不定（可能）

huta	(jə-)məkina	dənəgə-m	banə
3sm.SBJ	(M-)車	叩く-PST	AUX

「彼は車を叩いた」

o. 無生物・不定（不可能）

huta	metəf	sijə-m	banə
3sm.SBJ	本	買う-PST	AUX

「彼は本を買った」

4 考察

表1を見ると、以下のことが指摘できる。第一に、AZ氏が「必ず *ja-*がなければならない」と回答したものはいずれも人間を表す固有名詞＝人名が目的語となっていたものであった。またそのような場合には *ja-*が欠けることはあっても出現できないということはなかった。第二に、有生性において同じ分類に該当する目的語の場合、定の場合により *ja-*が現れやすくなっている一方で、同じ定の場合であっても人間を表す目的語の場合には全ての文で *ja-*が現れていたのに対し、無生物の場合には半数程度でしか現れていなかった。このことから、Leslau (1950) のような定性のみによる説明では不十分であり、少なくとも有生性を考慮に入れておく必要がある、ということが言える。

Aissen (2003: 436-7) は諸言語に見られる DOM について、有生性または定性の階層 (4) でより上位にあるものが目的語となる場合に標識が現れやすくなるとしているが、以上の2点はこの説明に合致するものである。

- (4) a. 有生性の階層：人間 > 有生 > 無生
 b. 定性の階層：人称代名詞 > 固有名詞 > 定の名詞句 > 不定特定の名詞句 > 不定不特定の名詞句

(Aissen 2003: 437)

それに対して、表1に示した結果でこれに当てはまらないのが無生物を表す固有名詞が目的語となっている場合である。Aissen (2003) の理屈に従えば、こ

の時には無生物かつ定の場合よりもさらに標識が現れやすくなっているはずである。しかし今回の結果はその逆を示している。現時点ではこの問題を解決するデータに欠けるため、今後の課題としてここではこれ以上扱わないでおく。

また、今回集めることの出来たデータからは *ja-* が広く出現する動詞とかなり現れにくい動詞があるらしいことが分かった。例として、前者から「叩く」*danaga* と「愛する」*namada* を、後者から「買う」*sija* を取り上げたい。*danaga* に対しては、無生物・固有名詞を除く 7 パターンの例文を採ることができた。その中で人間・固有名詞の場合には *ja-* が必須、その他全ての文で *ja-* を用いることができた。無生物・不定で *ja-* が現れうる一例はこの *danaga* のものである。また *namada* では 8 パターン全ての例文が採取でき、その中で *ja-* を用いることができないものは無生物・不定のときだけであった。それに対し *sija* では採取できた 8 パターンの内、*ja-* の出現が認められたのはわずかに人間・固有名詞の場合と人間・定の場合の 2 パターンのみであった。そのうち前者は *ja-* が必須で、後者は任意である。動物・定で *ja-* が現れえない 1 例はこの *sija* が本動詞となっているものであった。不思議なことに、「売る」*asija* の場合には、動物・定でも *ja-* が出現した一方、人間・固有名詞の場合にも *ja-* を伴わないことがありうる、という回答が得られた。以上のような動詞ごとの差異には 2 通りの解釈が考えられる。一方は有生性でも定性でもないパラメータが関与している、というもので、もう一方は動詞によって *ja-* の容認度が異なるというものである。この点については今後の課題である。本調査のデータからは後者の解釈がより適当であるように思われるが、無生物・固有名詞の場合に無生物・定の場合より *ja-* の出現率が低くなる、という点は有生性・定性だけでは説明できないため、第三のパラメータの関与が考えられる。

また、他動詞ではあっても、与格の名詞句を伴いやすい「与える」*a:mə* のような動詞の場合には目的語標示の *ja-* が現れることはなかった。おそらく与格が同じ小辞 *ja-* で表わされるため、それとの混同を避ける狙いがあるものと思われる。

5 まとめ

以上、簡潔ではあるが今回の調査で収集したデータからチャハ語の DOM について整理した。その結果、現時点では以下のような仮説が立てられる。すなわち、チャハ語の DOM はエジャ語などと同様有生性と定性の 2 つの要素が関わっており、それらの階層 (cf. Aissen 2003) でより上位にあるものはより *ja-* を伴いやすく、下位になるにつれて伴いにくくなる、というものである。今後は調査で用いる例文を増やしながらか、目的語名詞句についてもさらに細分し、*ja-*

が現れる条件及び現れやすさをより精密に検討する必要がある。また今回の調査では、AZ 氏の内省でも *ja-* の出現が揺れるものが散見された。また、同じく出現の揺れるものであってもどちらか一方がより好ましいとするものもあれば、特に差異を見出さない事例も観察された。このことはチャハ語の DOM が厳密なルールに基づいたものと言うよりはむしろかなり許容範囲の広い、緩やかな傾向というべきものであることを予測させる。従って、今後は個人差について明らかにするために、複数のインフォーマントから情報を得ることも視野に入れて調査を進めていく必要がある。また、本稿で提示した以外のパラメータが関与している可能性についても視野に入れておくことも重要である。

【参照文献】

- Aissen, J. (2003) "Differential Object Marking: Iconicity vs. Economy." *Natural Language & Linguistic Theory* 21 (3): 435-483.
- Bossong, G. (1985) *Empirische Universalienforschung: Differentielle Objektmarkierung in der Neuiranischen Sprachen*. Tübingen: Narr.
- Endalew A. (2014) *Descriptive Grammar of Ezha: A Central West Gurage Language, Ethiopic Semitic*. Addis Ababa: PhD Dissertation, Addis Ababa University.
- Leslau, W. (1950) "Chaha: An Outline of the Grammar." In: Wolf Leslau *Ethiopic Documents: Gurage*. New York: The Viking Fund Inc.
- Rose, S. (2007) "Chaha (Gurage) Morphology." In: Alan S. Kaye (ed.) *Morphologies of Asia and Africa, Volume 1*, 403-427. Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns.
- Schwenter, S. A. and Silva, G. (2002) "Overt vs. null direct objects in spoken Brazilian Portuguese." *Hispania* 85(3): 577-586.
- Sinnemäki, K. (2014) "A Typological Perspective on Differential Object Marking." *Linguistics* 52 (2): 281-313.